

もくじ

生理人類士資格認定制度のご案内	1
研究満喫(学位取得記)	2
第 83 回大会(京都大学)案内(第 2 報)	5
学会動静・編集後記	6

■生理人類士資格認定制度のご案内

立川公子

(2022 年度指定校責任者連絡会長)

本制度は、生理人類学の発展と社会的貢献を目的として、2000 年に創設されました。私たちが健康で快適に、そして感性豊かに暮らすために、人類とそれを取り巻く諸要素に関する基礎知識と応用科学の習得を目的とした資格試験です。

本資格には、生理人類士 2 級(アメンティスペシャリスト)、同準 1 級(アメンティコーディネーター)、同 1 級(アメンティプランナー)の 3 種があり、大学や短期大学に在学中の学生、社会人、そして専門家として実績のある方々まで広く対象としています。さらに指定校制度を設け、受験に際しての便宜を図っています。これまで生理人類士 2 級 1,696 名、同準 1 級 195 名、同 1 級 47 名が資格を取得され、御活躍中です。

例年、試験は 11~12 月に実施しています。なお、2020 および 2021 年度は新型コロナウイルス感染予防のため遠隔講義型としました。

2022 年度は従来方式(2 級および準 1 級は筆記試験、1 級は面接)とする予定です(図 1)。

この度、『新編 生理人類士入門』が刊行されました(2022 年 2 月発行)。生理人類学のキーワードである全身的協関、生理的多型性、環境適応能、機能的潜在性、テクノアダプタビリティをはじめ、生理人類学とは何かを理解するため、人類の起源と進化、文化、言語、情動、意識、感覚や発育発達などが網羅され、さらに研究方法や統計手法が加わり、初学者だけでなく広く研究者や教育者にも有用な内容となっています(図 2)。執筆陣は本学会員 53 名であり、総頁数は 263 ページにおよびます。項目毎に基礎から応用に対応した演習問題が設定されており、資格試験のためだけでなく、授業のテキストとして採用される大学もあります。

生理人類士認定制度に関する詳細な情報は、日本生理人類学会ホームページ([トップページ⇒学術活動⇒資格認定](#))に掲げてあります。あわせて「アメンティの機関紙」も御覧下さい。これには「資格取得者からのメッセージ(社会人の声)」や「合格者の声」が掲載されてい

ます。PANews 読者の皆様の、積極的な受験をお待ちしています。

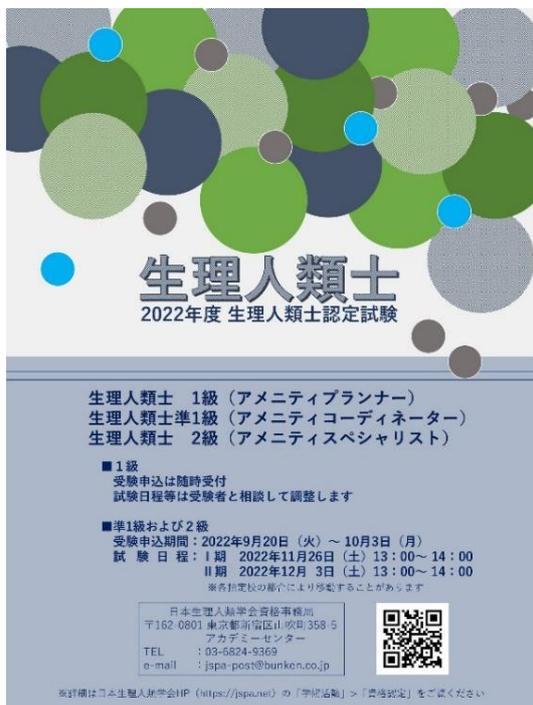


図 1 2022 年度版生理人類士案内ポスター



図 2 『新編 生理人類士入門』テキスト表紙

■研究満喫(学位取得記)

「遠隔コミュニケーションを人間工学の観点から研究、そしてコロナ禍へ」

深澤伸一(沖電気工業株式会社)

本 2022 年 3 月に千葉大学大学院工学研究科の博士後期課程デザイン科学専攻を修了し、博士(工学)の学位を取得いたしました。日常業務に追われ研究が遅々として進まなかった社会人博士の私を辛抱強く見守り助言を続けてくださった指導教員の下村義弘教授、論文審査を行ってくださった岩永光一教授ほか関係者各位に感謝いたします。また、私が所属していた千葉大学人間生活工学研究室の主要関連団体であり、研究発表や聴講の貴重な機会をいただきました日本生理人類学会の関係者各位にもここに感謝を申し上げます。

私の学位論文の題目は「状況伝達機能を有する遠隔コミュニケーションシステムの間工学的研究」です。研究の背景として、これまでテレワークに関わる社会実態調査の多くで「コミュニケーションが行い難くなる」ことが上位課題に挙げられています。しかし実は、その主要因はコミュニケーション自体ではなく、その前段にあたるアウェアネス(他者の日常的な活動状況を知ること)を伝達する機能が従来の電話や会議システムには備えられておらず、遠隔の相手の状況がわからないため話しかけが難しくなるという点にありました。本研究では、アウェアネスの伝達機能を有する遠隔コミュニケーションシステムにおいて、アウェアネスの情報を取得し話しかける側と、取得され話しかけられる側の各利用状況に必要な要素機能の提案と評価を行いました。話しかける側向けの機能として複数視点映像の提示、ズーム映像の提示、ズーム速度の最適値設定など、話しかけられる側向けの機能として気づきやすさと

作業集中性の面で優れる視覚的な動きの情報をもった通知の仕様を、それぞれユーザー評価実験を行い検証しました。そして、それら機能群の要素を搭載したユーザインタフェースを備える“超臨場感テレワークシステム”を開発し、複数拠点に分散した従業員チームに実際の業務環境の中で長期間利用させる実証評価を3種類実施しました。その結果、アウェアネスを伝達できる本テレワークシステムを利用することにより、テレワーク環境下でもコミュニケーションの頻度やつながりの大きさが棄損されずに増加し、特に従来のテレワークで失われがちであったインフォーマル・コミュニケーションに基づくつながりを醸成できることが示されました。

ところで、本研究はテレワークの支援システムに関する内容であり、2020年に世界に広がり人々の対面接触を制限したコロナ禍の中で時流を捉えたテーマのように見えるかもしれませんが、しかし実は、本研究はコロナ禍発生の何年も前、日本のテレワーク実施率がほとんど上がらず低空飛行が続いていた2010年代に主に進められたものです。コロナ禍前は本研究の価値に疑問を持たれることも少なくありませんでしたが、社会情勢の方が、私が予想もできなかった早さで変化し、テレワークとその支援システムへのニーズを急拡大させたのです。そのおかげで、昨年は日本人間工学会第62回大会(図3)や産業・組織心理学会第36回大会で本研究内容について招待講演を行う機会を与えていただき、共に100名を超える聴講者にご参加いただきました。放送作家・作詞家の秋元康氏が「止まっている時計は日に2度合う」と述べているように、流行りや明確なニーズが見えてから取り組みを始めるのではなく、そのとき傍流であっても本質的な価値を見極

め信じて活動を進めていくことの重要性を、まさに身をもって経験することができました。

最後に、私は2008年に千葉大学大学院の修士課程デザイン工学専攻を修了後、通信機器メーカーである沖電気工業株式会社に入社し、今日まで研究開発部門を歩んできました。そのうち最も長い時間関わった遠隔コミュニケーションシステムの研究開発活動の内容をこの度学位論文にまとめたものですが、その成果は周りの同僚や関係者の支援無しには到底成しえなかったものです。私はヒトのコミュニケーション行動やそれをシステム支援するための情報通信技術に関する知識は入社時ほぼ無く、まさにゼロスタートといった状況に苦労したのを覚えています。いまでもAI(人工知能)や対話システム等の新しい技術開発業務に関わり勉強の日々ですが、その活動の源は大学、特に[人間生活工学研究室](#)で培われた基礎力に支えられていると実感しています。企業における人間科学的な研究の実施環境は厳しさを増しており、企業による学会発表も減少傾向にある時勢ですが、今回の博士学位取得を契機として、一企業研究者としてより社会の発展に寄与できるような研究・商品開発活動を続けていきたいと考えております。今後ともどうぞよろしくお願いたします。



図3 招待講演の様子

「排尿の概日リズムの研究に取り組んだ 学位取得までの道のり」

中本五鈴(京都大学大学院医学研究科)

私は現在、生活環境看護学の研究室に所属しており、大学院に進学する前は大学病院で看護師として勤務しておりました。そして、2022年3月に京都大学博士(人間健康科学)を取得することができました(図4)。これまでの大学院生活を振り返りますと、今まで出会った皆様への感謝の気持ちでいっぱいです。



図4 若村研究室のメンバーと修了式にて
左から順に、初治さん、著者、
若村先生、藤野さん、大澤さん

修士では、ヒトでの研究を実施する予定で研究計画をたてていましたが、予備実験がうまくいかず、急遽、動物実験に取り組むことになりました。動物実験の初心者の方が、糖尿病モデルラットにおける運動による骨格筋繊維タイプへの影響についての修士論文を書き上げることができたのは、故・石原昭彦教授と研究室メンバーのおかげです。心より感謝申し上げます。この動物実験の経験は、その後の概日リズム研究の先行研究を理解する上で、大きなアドバンテージとなりました。

博士課程ではヒトの研究が行いたく、卒業研究を行った若村智子教授の研究室に進学しま

した。博士進学の前から、研究内容や共同研究の泌尿器科や関連する検査部の先生方へのお声かけ等、学生が研究を行うために必要な環境を、時間を惜しまずに準備して下さったこと、とても感謝しております。また、研究室の先輩方が実施していた研究にも参加させて頂けたことで、自分の実験運営のイメージができて、とてもスムーズに自身の実験を実施することができました。コロナ禍となる前に、幸運にもフランスでの国際学会に参加でき、世界の最先端で概日リズムの研究に取り組む先生方のお話を聞くことができました。この経験は、自身の研究プレゼンテーション能力の低さを反省するとともに、社会に貢献するインパクトのある研究を行っていききたいという、研究のモチベーション向上につながりました。

また、日本生理人類学会第80回大会と第82回大会の示説発表で優秀発表賞という大変名誉な賞を頂くことができました。これらは、ヒトの排尿タイミングに関する実験室研究と、光環境と排尿に関する高齢者を対象にした調査の疫学研究でした。特に、実験室研究では、論文執筆で、統計や考察の箇所でも迷い苦労していたため、研究を評価して頂いたことは、背中を押してもらっているような気がして、頑張りにつながりました。また、学会発表時には、多くの先生方からの示唆に富むコメントによって、狭くなっていた視野を広げて頂きました。

私自身の研究テーマである「排尿の概日リズムを整えて、夜間頻尿や夜間頻尿による睡眠問題を改善できないか」に関して、博士課程の3年間で実験室研究から疫学研究にまで取り組めたことは、博士号の取得につながりだけでなく、今後研究者としての道に進んでいく上で、濃密で貴重な経験ばかりでした。

最後になりますが、若村研究室の卒業生の

皆様、院生の皆様、研究員の先生方に心より感謝申し上げます。そして、まだまだ未熟ですが、今後は、大学の研究者の一人として、生理人類学の発展に貢献できるよう精進してまいります。

■第 83 回大会(京都大学)案内(第 2 報)

大会長 仲村匡司(京都大学)

[PANews Vol. 31, No.3](#) (2021) に掲載された大会案内(第 1 報)では「(大会を)3 年ぶりに対面式で開催することを決意いたしました」と宣言しました。その舌の根も乾かぬこの第 2 報において、「第 83 回大会をハイブリッド形式で開催する」ことをお伝えします。

大会長のお話をいただいたのが約 1 年半前。その時点から見て 2 年後の 2022 年の秋には新型コロナウイルス禍も収束しているの見込み、3 年ぶりとなる対面式での大会開催を目論みました。また、大会案内第 1 報を書いた 2021 年 12 月における日々の新規感染者数は、全国集計で 100~300 人とかなり落ち着いておりましたので、この調子が続けば翌年の秋には対面式で開催できると期待しておりました。しかし、ご存知の通り、2022 年が明けるやオミクロン株の猛威に見舞われて感染者が激増し、春たけなわの今もその数は高止まりしています。

そのさなか、集客を前提とする様々なイベントが定員を半分程度に抑えて開催されています。私が勤務する大学での授業も、受講者数を教室の定員の半分までとして、全員マスク着用の上、対面式で行われています。仮に現在の感染状況が秋まで継続した場合、この定員ルールも維持されるでしょう。対面式で当たり前に行われていた従前の大会には 200~250 名の参加がありましたので、第 83 回大会を対面式で行うのであれば定員 500 名程度の会場

が必要となります。

今回、口頭発表や特別講演、シンポジウムなどを行うためのメイン会場として確保した大講義室の定員は 300 名強で、従前通りの参加があると密な状態が発生します。また、ポスター発表では、各ポスターの前に人だかりが生じることは必然であり、どんなに大きな会場を確保しても密になることを避けられません。飲み物片手に談笑する休憩室も然りです。

大会実行委員会において、対面式で開催したときのリスクについて議論し、人が集う余地を残しつつ人数制限をかけられるハイブリッド形式での開催が妥当という結論に達しました。ポスター発表は[第 81 回](#)、[第 82 回](#)大会と同様にオンラインで行い、また、大変残念ですが、懇親会の開催を見送ります。新たな変異株の出現などによって感染状況が深刻化した場合には完全オンラインに切り替えます。その見極めは 8 月下旬を予定しております。会員のみなさまのご理解を得られれば幸いです。大型連休明けを目処に大会ウェブサイトを立て上げ情報を発信いたしますので、どうぞよろしく願いいたします。

大会概要

- 1) 会期:2022 年 10 月 28 日(金)~30 日(日)
- 2) 会場:京都大学北部キャンパス(農学部総合館 W100 講義室、旧演習林事務室
<https://www.kais.kyoto-u.ac.jp/japanese/access/>)
- 3) プログラム(予定)
フロンティア・ミーティング(10/28) ハイブリッド
一般口演(10/29、30) ハイブリッド
ポスターセッション(10/29、30) オンライン
シンポジウム(10/30) ハイブリッド
特別講演(10/29 13:30-14:30) ハイブリッド
「有人宇宙学(仮題)」土井隆雄宇宙飛行士(京都大学特定教授)

■学会動静

・日本生理人類学会第 83 回大会

大会長: 仲村匡司(京都大学)

会期: 2022 年 10 月 28 日(金)~30 日(日)

会場: 京都大学北部キャンパス(農学部総合館 W100 講義室ほか)

オンラインとのハイブリッド(ただし、完全オンラインの可能性あり)

・日本生理人類学会第 84 回大会

大会長: 前田享史(九州大学)

会期: 2023 年春(5~6 月)または秋(10~11 月)開催予定

会場: 九州大学西新プラザ(検討中)

編集後記

今号の PANews はいかがでしたでしょうか。これを機に、生理人類士の受験をぜひご検討ください。また研究満喫の記事や大会案内を読んでいると、つくづく、先生方や仲間という人の繋がりと、研究室という場所の大切さが身に染みてきます。PANews では研究室紹介の記事も常時募集しています。入学・進学希望学生への案内書として、オムニバス授業でのダイジェスト説明書として、あるいは共同研究でのちょっとした名刺代わりに、いろいろと活かせる記事になると思います。皆様の投稿をお待ちしております。どうぞよろしくお願い致します。(下村)

次号予定

第 83 回大会(京都大学)案内(第 3 報)、技術紹介など

2022 年 7 月末原稿締切

<p>PANews 編集事務局</p>

<p>下村義弘(千葉大学デザイン・リサーチ・インスティテュート)</p>

<p>shimomura [at] faculty.chiba-u.jp</p>
--